

## 西 鶴 雜 感

——代作者・助作者の問題——

現代、流行作家といわれる人には代作者がいる、といったことはしばしば聞くところである。かつて故稲垣達郎教授から聞いたことであるが、文芸春秋社のエレベーターの中で、菊池寛にあったある人が、「先生が今度「日の出」に書いておられる作品は、大変おもしろうございました」と挽抄したところ、寛は「そうです、読んでみましょう」と答えたという。この話、稲垣先生が誰から聞かれた話かは確かめることをしなかったが、謹厳誠実な先生のことである。この話は、しかるべき人から聞かれた話であろうし、菊池寛ならそんなこともあったろうと思われる、私にこの話をして下さったのであろうが、文芸春秋社の社長、文化学院の文学部長、大映社長などと、文筆活動のほかに多彩な文化的活動をしていた菊池寛なら、作品の執筆を代作者に委ねるということもありうると思うられる。代作の事実、作家と代作者、編集者が最もよく知っているわけであるが、代作を依頼した作家、代作者ともこの事実を明らかにするということはないであろうし、編集者もまず第三者に口外することはなかろう。私の知る限りで

## 神 保 五 彌

は、高森栄次氏がその著「想い出の作家たち——雑誌編集50年——」（昭和六三年刊）の中に、代作の問題について触れられているだけである。高森氏は戦前から戦後にかけて、博文館の雑誌「新青年」や「譚海」の編集長を長く勤められた人であるが、氏は同書の「代作ものがたり」という一文の中で、次のようなことを書かれている。

昔は随分代作ということが行われた。博文館の少年雑誌「少年世界」の、高森さんの前の編集長堀さんという人は、毎月せつせと三上於菟吉の名で少年小説を連載していた。

（その他恐らく高名な作家で、自分の名前を弟子たちに貸して稿料を稼がしてやった例はたくさんあろう。）

新潮社が雑誌「日の出」の次号予告に仮題をつけて久米正雄の小説が載るとしたが、どうしても間に合わない。しかたなく山岡荘八に代作を依頼したところ、久米正雄の名で、久米正雄の稿料でただちに書いた山岡の小説がすばらしいものであった。

（これはうまい、私なんかより遙かにいゝ作品だ、ウーン）

と久米先生が唸ったという。このことは山岡莊八自身の口から聞いた話であるから確かであろう。

高森氏はさらに、江戸川乱歩の小説が間に合わなくて、横溝正史がピンチヒッターに立って三つの作品を代作した話を紹介し、続いて富田常雄の代作者の件を記しておられる。

戦争直後、博文館に「ストーリー」という雑誌があり、編集長の高森氏は、「姿三四郎」で一躍文名を馳せた富田に小説を依頼したところ、送って来た作品は内容も文字も富田のものとは思われない。山岡の傑作や乱歩の代りの横溝の力作なら別だが、掲載して作者の名を辱かしめる作品は載せるにしのびない。私は富田宛に電報を打つことにした。

「アノシヨウセツ ノセテヨイカ

折返し富田から電報が届いた。

「バレタカ アヤマル ノセナイデクレ」

編集者は、ふつう代作といった作家が秘密にしておきたいことを口外しないものである。高森氏が「代作ものがたり」としてここに紹介したような一文を草されたのは、高森氏は現在八十八歳、「想い出の作家たち」が出版された昭和六十三年春は八十五歳、長い人生の最後に、昭和三年以来六十年間に及ぶ編集者としての、自分の体験した作家たちとの関わりを書き残して置いてもいいのではないか、とのお気持ちからであろうし、何よりもこの書に登場する多くの（大衆文学の）作家たちと高森氏との関係は、作品を提供する側の者と、作品を依頼して稿料を支払う側の者とい

う関係以上に、強い仲間意識で結ばれていたからであろう。「想い出の作家たち」を一読すれば、この事は何人でも納得されるところである。

いずれにせよ、流行作家の場合、代作ということはある得る、あるいは一流の作家が少年・少女向けの小説を発表するような場合、しばしばそれは代作者の執筆であるということは、多くの人が漠然と認めているが、しかし代作の事実そのものについては語られてこなかった。「日本近代文学大辞典」にも、「代作」は立項されていない。右の高森氏の一文は、その点では極めて貴重といわなくてはならない。

近代に代作という事実があるなら、近世に代作があったのは当然である。爲永春水は清元延津賀を初めとして多くの代作者・助作者を擁し、小説工房を作っていた。八文字屋は江島其磧や多田南嶺をお抱え作者として持っていた。八文字屋は本屋であり、春水はその出発が青林堂という本屋であった。出版文化の時代に突入した近世、近代と同じように小説が商品として売られていたのが近世であったのだから、八文字屋や春水の場合以外にも、一流の作家の場合代作があったのではないかと疑念は当然起ってくる。秋成や馬琴の場合はまず考えられないとしても、西鶴の場合ありうるのではないかとの疑問は、当然考えられるところである。貞享四年、五年の西鶴の作品数は、西鶴一人で執筆したと考えるにはちょっと多すぎるという感じがするからである。

西鶴に代作者、助作者があるということを最も早くいわれたのは森銑三氏であった。昭和二十五年の『西鶴研究』第三集に発表された「所謂西鶴作浮世草子の半数は他作なり」に始まって以来、森氏の次々と発表された論文では一貫して西鶴に代作者、助作者ありを精力的に主張され、『好色一代男』だけが西鶴単独作であって、他はすべて他作であるといわれるまでに発展していった。主張される論拠を、氏は『好色一代男』と他の西鶴作といわれる作品文・用字とを比較され、『一代男』の文字には詩があるが、他の西鶴作品といわれる作品の文章には詩がない。西鶴は詩のない文章は書かないと断じられていた。森氏が西鶴を偉大な作家として認められていてこの発言があることが、私には理解できなかった。『好色一代男』に詩があらうと、なからうと、散文作品であることにまがいはない。散文とは、態度として詩を拒否することとに成立するものである。文辞のはしに詩を感じようと感ぜまいと、それをもって「一代男」を偉大な散文作品として認めるのはおかしいのではないか。したがって、このことをもって『好色一代男』以外の、西鶴作といわれる作品は西鶴作ではない、といわれるのは私には納得できなかった。

また「一代男」と他の西鶴作品といわれる作品の用字・文・文体を比較して、その相違から西鶴・非西鶴の根拠とされていたが、小説の場合同一の作家であっても、描くべき対象・テーマによって文・用字の違うのは当然ではないか。私には森氏の説はどうしても理解できなかったのだが、ただ森氏の説が、それまで西鶴作と無批判に考えられていた作品に、あるいは代作者がいたのでは

ないか、助作者の作品が混入しているのではないかと考えさせるための刺戟力になったことは確かである。

西鶴の作品に代作者の作品がある、あるいは代作者・助作者の作品が混入しているのではないかとの疑問を誰しも持つのは、単純に考えて貞享三年十一月刊の『本朝二十不孝』以下貞享四年・五年（元禄元年）に刊行された作品群である。『本朝二十不孝』五巻五冊、全二十章。貞享三年一月刊『男色大鑑』八巻八冊、全四十章。同三月刊『懷硯』五冊、全二十五章、同四月刊『武道伝来記』八巻八冊、三十二章。貞享五年一月刊『日本永代蔵』六巻六冊、全三十章。同二月刊『武家義理物語』六巻六冊、全二十六章。同三月刊『風無常物語』上・下二冊。同六月刊『色里三所世帯』上・中・下三冊。同九月以前刊『好色盛衰記』五巻五冊、全二十五章。同十一月刊『新可笑記』五巻五冊、全二十六章。これだけの作品が貞享三年十一月と貞享四・五（元禄元）年の短期間に出版されているのである。濫作と称してもよいこの現象を、天和二年十月刊の『好色一代男』から『諸艶大鑑』（貞享元年）・『西鶴諸国ばなし』・『梔久一世の物語』（貞享二年）・『好色五人女』・『好色一代女』（貞享〇年）を出版したことで流行作家になった西鶴に、西鶴の作品を出版することで利益を得ようとした書肆が次々と原稿を依頼し、西鶴がそれに応じて多作したとする考え方、すなわち西鶴が出版ジャーナリズムに支配されてしまった結果だと見る立場と、西鶴の時代大阪の出版業者はそれほど大きくはなかった。出版業者が西鶴を支配し拘束したことにより西鶴が多作したと考え

るより、小説を書くことに自信を得た西鶴が、興の赴くままに次に作品を執筆し、作品を本屋に提供して出版させることで、むしろ西鶴は本屋をリードする立場にあったとする考えと、二つの考え方が成立する。西鶴没後大阪の本屋は、元禄末年に書肆正本屋九左衛門が作家西沢与志として登場するまで、西鶴以外の作者の小説をほとんど出版していないという事実、もし大阪の本屋の商業主義が西鶴を支配し、拘束して西鶴に濫作を強いたとするならば、西鶴の没後新しい作者を発掘して小説を出版したはずであるというふうに見えるのが妥当であろうから、後者の方ではないかと私には考えられるのだが、いずれにせよどちらの場合にしても、代作者がいたのではないかという疑問は残る。

仮りに代作者がいたとするならば、本屋でもあった西沢一風や八文字屋自笑が、その事実を知らなかったということは考えられないだろう。仲間の本屋から西鶴の作品といわれる物が、実は代作者が書いたのだという情報ぐらいは当然耳にするはずである。もし八文字屋自笑が西鶴に代作者がいたと知っていたら、江島其磧一人を専属作者、代作者として抱えておくということを、抜けない本屋商人である八文字屋自笑がするはずはない。少くも西鶴に代作者がいた例にならって、二人・三人の作者を専属として抱えていたはずであり、そうであつたら正徳元年より享保二年までの七年間の自笑・其磧の分裂時代、自笑は其磧とあれほどまでの泥仕合を展開する必要はなかったはずである。もっと余裕のある対応がとれたはずであるし、其磧の方も八文字屋のどの作品は、自分以外のどういう代作者が書いたかを暴露したはずである。あ

るいはまた、もし西沢一風が本屋として西鶴に代作者がいたと知っていたなら、都の錦に小説を書くことをすすめた一風である。西鶴に代作者がいたことを、当然都の錦に話したはずである。そうだとすれば、『元禄太平記』巻之一で、京都と大阪の本屋仲間の内情を暴露し、西鶴無学文盲説を唱えた都の錦である。西鶴に代作者がいたことをもって、西鶴非難の説を展開したはずである。自笑・其磧の分裂時代の自笑の其磧への対応の仕方、また其磧の自笑への非難の仕方から考えて、都の錦の西鶴非難が無学文盲説と原稿料を前借りしてけっきょく作品を執筆しないで終ったとすることだけで終っていることから見て、私には西鶴に代作者がいたということは考えられない。

次に、西鶴の一部の作品集―『本朝二十不考』以下の短篇集の中に、門人であった北条団水や、『近代艶隠者』の作者西鷺軒橋泉などの他の作者の草稿が混入していたという事実はあるのだろうか。この場合代作者というよりも助作者という方がより適切であろうが、この疑問は誰しも抱くはずである。男色というテーマで四十の短篇を収める『男色大鑑』、敵討というテーマで三十二の短篇を集めた『武道伝来記』等々、貞享四・五年の西鶴の作品集を見ると、個人の能力を超えているかの感はいないところである。『男色大鑑』八巻八冊、各巻五章を集めて全四十章を一部の商品集として書肆に草稿を渡さなければならなかった場合、西鶴自身気に入らない草稿、門人その他の作者の草稿をも取り入れてともかく一部の作品集を完成するということは、あるいはあ

ったかも知れない。誰しも抱く疑問である。その場合、西鶴が俳諧師であったことが考慮される。宗匠として連句一卷を巻くとき、指導的立場にあった西鶴が、一座の連衆の句を指導訂正する、時には加筆改作することは当然あつたはずである。西鶴が連句一卷をさばくわけである。宗匠としての西鶴のこの姿勢がそのまま浮世草子に持ちこまれる。門人や他の作者の小説を、適宜加筆・訂正して自分の作品集の中の一章として混入させる。西鶴のさばいた連句一卷を西鶴の連句と呼んでふしぎに思わなかった当時の人々は、門人や他の作者の作品が混入していても西鶴の作として疑わなかったろうし、宗匠であつた西鶴もまた何ら疑問に思わなかったとするのである。

このような考え方に疑問の余地はないのであろうか。宗匠として連句一卷を巻く場合、そこは連衆の談笑の場である。指導者として西鶴が連句一卷をさばく場合、連衆の人々がそれに疑問を持つことはありえない。西鶴のさばきによって、連衆の人々の参加した連句はより完成したものになるうし、連衆の人々ともに芸術的境地にひたる事が出来る。その上で、それが公刊されて西鶴の連句と呼ばれようと、連衆の一人々々の名は紙面に定着して残っているわけである。仮りに加筆訂正された句であろうとも、連句を巻いた時の一座の空気を思い出して、その作者は充分に満足できるものである。

西鶴の小説の場合はどうであらうか。独吟の矢数俳諧を経ることによって、西鶴が小説作者たりえたという図式に疑問を呈する人があつたとしても、独吟千六百句、独吟四千句興行をやつての

けた後に、小説の処女作『好色一代男』が出版されたことは事実である。矢数俳諧の興行の場合、連衆の参加はない。「生玉に大幕うたせ一日四千句の矢数俳諧を喰す、当地宗匠親疎ともにつらなり、(略)其外名を得るも得ぬも稻麻のごとくぞり、竹葦のごとくまどゐて耳を傾け」(『西鶴大矢数』序)というのが実態である。「大矢数」の場合、各巻初表八句に西鶴以外役人の連中がそれぞれ参加しているが、これは正規の俳諧興行であることを示すために役人に加わつてもらつたもので、矢数俳諧は飽くまで独吟である。仲間には西鶴と一座しない。仲間を向う側の聴衆の座に追いやって営む孤独な作業が矢数俳諧であり、それはそのまま小説を執筆する作家の姿勢と同じである。矢数俳諧を通過することで小説を発表した西鶴が、宗匠として連句一卷をさばいたとおなじ姿勢で、門人や他の作者の作品を自分の作品集に混入するということは、おそらくなかったのではないか。

門人や他の作者の作品を自分の作品集に混入することはなかったとしても、門人その他から素材の提供を受けたということは、当然ありうる。延宝七年三月刊の『西鶴五百韻』は西鶴の外に山本西六、松井西花、水田西吟、山本西友の参加した連句であるが、そのうち山本西六と西友はおそらく同族の人で、うち山本西六は『太夫櫻』『二葉集』に見える山中西六と同一人で、山中式三代目鴻池善右衛門であろうとされ、『西鶴五百韻』は延宝七年三月吉日、鴻池酒の本家山中西六亭で西鶴らを招いて興行された連句とされている(『定本西鶴全集』第十一巻下解説。信すべきであり、蒙商鴻池善右衛門が西鶴から俳諧の指導を受けていたとすれば、当

主に限らない、鴻池の人々から小説の素材となるべきさまざまな話を西鶴が聞いたことは、当然考えられることである。『西鶴大矢数』の役人で後座を勤める高石石斎は堺の糸割符商人高石屋長右衛門である。万一の事故を慮って独吟者西鶴の後の席に座を占める後座の役人を勤めた石斎高石屋長右衛門は、当然西鶴と極めて親しい関係にあったと見てよく、西鶴は堺についての情報、糸割符商人である以上当然長崎へ下ったであろうから、長崎についての情報など聞いたはずである。一々調査するにも及ぶまい。元禄初年には松前貿易全盛期である。このことは、上方町人の資本が全国の市場を制覇したことを示すものであり、具体的にどのような町人からどのような地方の話を聞いたかを知ることが出来ないものの、大阪から各地に下った多くの商人たちから、俳席で、また遊里で、小説の素材となるような話を西鶴は聞いたはずである。あるいはまた、西鶴が小説を執筆することを知っている上方の商人が、積極的に素材を提供する場合ももちろんあったであろう。『本朝二十不孝』から『新可笑記』までの、貞享三年の後半から元禄元年にいたるまでの西鶴の多数の作品の素材は、こうして西鶴の手もとに蓄積されて来たはずである。もしこれらの西鶴の作品に代作者・助作者がいたとするならば、それらの人は、西鶴没後何故に自分の名前で作品を発表しなかったのであろうか。

西鶴の門人北条団水は、西鶴作品の代作者にしばしば擬せられている。団水は貞享四年に『色道大鼓』を自分の名で、『武道一覽』を神保氏入道の名でというふうに、いくつかの作品を西鶴存

命中に出版していた。その団水は、西鶴没後大坂谷町の師の旧庵に移り住み、師の菩提を弔うとともに、西鶴の遺稿を整理編集して、遺稿集として出版していた。その際、西鶴の遺稿の中に自分の作品を混入し、一部の作品集として完成させ、遺稿集として出版するということは当然考えられるところであった。団水は西鶴の遺稿集を出版した後、宝永二年八月に西鶴十三回忌の法要を勤め、翌三年正月、この時の追善俳諧集『こころ葉』を出版している。この後から団水は再び浮世草子作者として登場する。すなわち宝永四年刊の『昼夜用心記』以下の団水晩年の作品である。西鶴没後から西鶴十三回忌の法要を営むまで自作の俳書、浮世草子を出版せず、元禄十二年刊の『西鶴名残之友』を西鶴最後の遺稿集として出版し、西鶴の十三回忌法要までひたすら西鶴の遺稿集の編集に従事していたのである。師を追慕すること甚しく、極めて誠実な人柄であった団水の姿を見ることが出来、その団水がともかく一部の遺稿集として出版するために、自分の作品を西鶴の作品と一緒にして出版するということは、たしかにありうることである。その際、短篇集の形式をとる作品で、冊数と、収められた作品数とを、生存中に出版された作品と、遺稿集としての作品について考えて見る必要があろう。

西鶴生存中に出版された短篇集としての西鶴作品は、『諸艶大鑑』八冊、各冊五章全四十章、『本朝二十不孝』五冊、各冊四章全二十章、『武道伝来記』八冊、各冊四章全三十二章、『日本永代蔵』六冊、各冊五章全三十章、『世間胸算用』五冊、各冊四章全二十章というふうに、各巻各冊に収める短篇の数は一一定している。

『新可笑記』五冊全二十六章（巻二のみ六章、他はすべて五章）と『本朝桜蔭比事』五冊全四十四章（巻一のみ八章、他は九章）だけである。各冊に収める短篇の数が一定しているのは、各冊の厚さを一定のものとするためである。商品としての見ばえをよくするためであり、おそらく出版元の要請があり、作者の西鶴がそれに応じたものであろう。試みに『諸艶大鑑』について見ると、巻一は廿六丁、巻二は廿五丁、巻三は廿一丁、巻四は十九丁、巻五は廿丁、巻六は廿二丁、巻七は廿丁、巻八は廿丁、各冊の厚さはほぼ同じであり、『本朝二十不孝』では巻一は序文一丁、本文十九丁、巻二は十九丁、巻三は十六丁、巻四は十八丁、巻五は十七丁というふうに厚さがほぼ一定している。この各冊の厚さがほぼ一定しているのは『世間胸算用』まで同じである。ところが西鶴没後に刊自された遺作集では、『西鶴置土産』五巻五冊、各巻三章全十五章がととのった姿を見せているだけで、『西鶴織留』は六冊二十三章、（巻一は四章、巻二は五章、巻三は四章で巻四・巻六は各三章）、『西鶴俗つれづれ』は五冊十八章（巻一・三・四が各四章、巻二・五が各三章）、『万の文反古』五冊十七章（巻一・五が各四章、巻二・四章が各三章）、『西鶴名残之友』は五冊二十七章（巻一は四章、巻二・四は各五章、巻三は七章、巻五は六章）である。西鶴の遺作集のうち、北条団水が関与した痕跡が見られないのは『萬の文反古』だけである。他のすべては序文、跋文に北条団水が整理編集したことを語っている。団水は版元と交渉もあり、西鶴生前の作品は熟知していたはずである。各冊に収める短篇の数が一定しており、その結果各冊の本の厚さがほぼ同じである方が、商品として見ばえがよいとい

うことは充分に知っていたはずの団水が、このように不揃いのままで遺稿集を出版したということは、師の遺稿はそのまま出版するという団水の誠実さからではなからうか。『西鶴織留』の副題をすべて「世の人心」とする元禄原刻本が、巻一・二の副題を「本朝町人鑑」、巻三以下の副題を「世の人心」とする元禄通行本に変わったのも、『西鶴織留』の編集に関与した北条団水の意志が働いていたとしか考えられない。西鶴の遺した「本朝町人鑑」と「世の人心」をそのままの姿で読者に伝えようとし、版元が原刻本で副題をすべて「世の人心」としたことが団水に許せなく、通行本で副題を「本朝町人鑑」「世の人心」と変えさせたのではないか。師の原稿に手を加えたり、自分の草稿を混入させたりしないで遺稿集を整理編集した団水の姿勢と、それはそのままつながるものではなからうか。そしてもし、西鶴が生前に団水その他の人の書いた草稿を自分の作品集に混入させ、一部の作品（短篇集）を完成させていたなら、遺稿集に団水は自分の作品を混入させ、形をととのえて出版することをためらわなかったはずである。このように考えた時、西鶴生前の短篇集にも、門弟その他の作者が混入する、すなわち代作者・助作者がいたということは、考えられないのではなからうか。遺稿集『西鶴置土産』だけは五巻十五章とととのった形で出版されており、巻一の初めに西鶴の辞世を載せ、談林俳人の追善発句を載せるなど追善のための出版という色が濃く、西鶴の遺稿に団水が若干加筆したところはあるかと思われ、それ以上ではあるまい。

仮りに西鶴の生前の作品、また遺稿集に代作者・助作者として

団水が関与していたとするなら、西鶴十三回忌が終り、西鶴の遺稿集をすべて出版し終えた後、創作を再開した団水の作品が、あまりにも拙劣な事実をどう解釈すればよいのだろうか。『昼夜用心記』から『日本新永代蔵』（宝永三年刊）までの団水の作品に収められる短篇は、西鶴生前の作品、没後の作品のうちで、出来のよくないと思われる短篇集に比べても遙かに低劣である。一人の作家が、年をとるに従って創作力が涸渇してすぐれた作品が書けなくなるといった状況を、団水にあてはめようとしても無理である。『昼夜用心記』や『日本新永代蔵』の拙劣さは、『色道大鼓』や『武道一覧』とおなじ拙劣さなのである。

西鶴に代作者・助作者がいなかったとしても、しかし貞享三年十一月刊の『本朝二十不孝』から元禄元年十一月刊の『新可笑記』にいたるまでの、すべて十部の作品集に収めるすべての短篇を、どのようにして執筆することが出来たのかという疑問は残る。二年間という短期間、あまりにも多量の作品群だからである。その場合、独吟二万三千五百句を完成させた西鶴である。執筆することが出来たのだ、というのでは解答にならない。私はあの量の作品を二年間で刊行しえた理由を、『本朝二十不孝』から始まる西鶴の創作の方法に求めたい。一定のテーマによって、一部の短篇集に収めるすべての短篇を統一するという方法である。『本朝二十不孝』なら不孝、『男色大鑑』なら男色、『武道伝来記』なら敵討というテーマによって統一する方法である。この方法はやがて『万の文反古』における書簡というスタイルによって、さらに

『世間胸算用』のように、大晦日という特定の時間によってすべての短篇を統一するというふうに進んでゆくのだが、『諸艶大鑑』によって、西鶴は読者に慰草を提供する職業作家としての態度を確立していた。その西鶴は、また『西鶴五百韻』の序文で、「夜更て帰は俳諧師そかし」と自分を位置づけていた。俳席や遊里で大町人たちと交歓した西鶴は、彼らから聞いたさまざまな小説の素材となるべき話を、下戸ゆえのさめた頭で反響しながら西鶴庵に帰って行ったはずである。いずれにせよさまざまな形で蓄えられた小説の素材が、テーマに従って採りあげられ、一部の短篇集の成立のために動員される。しかも西鶴の短篇は、西鶴が咄し手としての位置について、奇異なる話、おもしろい話を読者に語るというスタイルであった。このスタイルで短篇をつくってゆくことは、二万三千五百句独吟をやったのけた西鶴なら、二年間で十部の作品というのも無理ではなかったと思われる。現代でも流行作家になって多数の作品の執筆を出版社から強制された場合、例えば梶山季之の晩年の作品が、ほとんど説話的スタイルであったように、作家は語り手として読者におもしろい話を提供するという姿勢に移行してゆくのである。西鶴の場合、本屋に強制されるということとはなかったと思われるが、興に乗じて多数の作品を執筆する場合、説話的スタイルは最も効果的に機能したのではないか。

以上、実証を伴わない推論に過ぎないが、西鶴の場合代作者・助作者はまずいかなかったらうというのが私の結論である。近世の小説の場合、代作者や助作者の姿が浮かびあがってくるのは、出版



業者がより多くの作品を出版して利益を大きくしようとする場合  
なではなからうか。八文字屋がそれであり、青林堂主人越前屋  
長次郎、二世南仙笑楚満人がそれである。爲永春水の場合、二世  
南仙笑楚満人時代の姿勢が、そのまま持ちこされたものであった。

#### 附記

右の拙文をお読み下さった方はおわかりになると思いますが、

拙文は「新日本古典文学大系 月報4」に掲載された中村幸彦  
先生の「西鶴助作者論義」なる一文に刺戟されて書いたもので  
す。結果として先生のお説きになるところに異を唱えるようにな  
りましたが、先生もご自分の文章の最後に「実例を示さず想  
像ばかりつらねた、夢論義とお笑い下さい」といわれています。  
この拙文も神保の夢物語としておゆるし下さい。

#### 新刊紹介

徳田武著

#### 『江戸漢学の世界』

学界随一の中国白話小説通と目される著  
者は、読本を中心とする近世小説を対象と  
して、日中比較文学的な視点から数々の新  
見を世に問われた。かたわら、遙か若年の  
みぎりより江戸時代の漢詩文を掌中の珠の  
ごとく慈んでこられた。それぞれの成果は  
『江戸詩人伝』、『日本近世小説と中国小  
説』にまとめられているが、この度の第三  
論文集は、漢詩文と江戸小説の両分野に亘

るものをほぼ均等に収録するものであり、  
それがかえって江戸時代中後期の豊饒な漢  
学の世界を開示することに効を奏している。

「遠山荷塘と広瀬淡窓・亀井昭陽」「宇野  
明霞の訓法の悲劇」「野村篁園の罵蚊詩と  
『淵鑑類函』」「篁園詩注釈二首」「唐土名  
勝図会」典拠探原」「一つの『絵本漢楚軍  
談』と『西漢演義』」「北里憲慈録」白話

語集出拠考」「読本と清朝筆記小説」「近  
世説美少年録」と『緑牡丹』と目次を列  
挙してもその江戸漢学への切り込みの角度  
がバラエティに富むことが分る。

一見佶屈聱牙な印象を与える漢学を相手

どっても、著者の人間探求の姿勢は一貫し  
ているので、各論文において「文学」は葬  
り去られていない。試みに冒頭の荷塘伝を  
読み進み給え。淡々たる編年体の筆致の中  
に人物は生動し、情念がほとばしる。人は  
さながら鶴外の史伝三部作を繙読するのと  
同じ感動に打たれるであらう。

(平2・7 ぺりかん社 A5判 三〇〇頁 三  
八〇〇頁) (池澤一郎)